ダイヤのエース　君に捧げる一球

ダイジョーブ博士

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夏川唯は青道高校野球部のマネージャーをしている。何時も毎日通って通学路に一人の男子の姿を見ていた。そんなある日、彼女は意を決して男子に声をかけてみることにしてみたのである。

そして彼の過去の片鱗を知った彼女は、自分の通っている青道高校の野球部推薦入学を進める。この選択がどのような結果を持っていくのか誰にもこの時点では分からなかった。

※これはダイヤのエースとオリ主を混ぜた作品となります。

※少し、作者は筆跡が遅いために更新が遅いです。すみません

目次

序章
第1話　プロローグ　―――　1
第2話　推薦テスト　前編　―――　15
第3話　推薦テスト　後編　―――　29

序章
第1話　プロローグ

夕日が落ちる時間帯に一人の男子が壁に向かって硬式専用のボールを投げ込んでいた。壁には不良達によって落書きされてしまっただろう。黒スプレーで引かれた野球の標準的なストライクゾーンに投げ込んでいるのである。

男子の身長は恐らく１７８センチ程のものである。体系はどちらかといえば筋肉質に近いものと伺える。

「はぁはぁはぁ……今ので大体６０球程の投げ込みをしたのかな？」

恐らく1時間ほどゆっくりと感覚を確かめながら投げ込みをしているのだろう。大粒の汗が額から滝のように溢れ出ていた。男子は大きく息を吸い、そしてゆっくりと息を吐く。それを5分ほど続けていくとある程度息が整ってくる。

「さて、日が落ちるまでまだ時間があるから少し投げ込みでもしてから帰ろうかな？」

そう言ってからまた、男子は壁に向かって投げ込みを開始する。

オーバースローで振りかぶって投げる。男子が投げたのはスライダーである。キレ味と変化量も申し分ない程のものである。それを自分の願っていた場所に向かって投

げ込む。寸分の狂いもなくストライクゾーン投げ込まれていく。

２球目に投げ込むのはスローカーブである。球速は恐らく１１０前半くらいまで落ちている。通常のカーブよりも更に遅く、一段階落ちていく。　ストレートとのコンビネーションで強豪校相手になら1巡目くらいは抑えれるのではないだろうか。

３球目投げ込んでいくのはフォークである。人差し指と中指の間にボールを挟み、手首の関節を固定しリリースする。代表的なフォークの投げ方である。しかし、これを投げるには相当な握力が必要である。その投げ方で投げ込む。するとそのボールは真ん中に行くと思うと突如落ち始めるのである。ストーンと落ちていく。そのこれほどまでに綺麗に落ちていくのはなかなかないのである。

４球目に投げ込まれたのはストレートである。球速は大体１３０後半程のものである。

そして彼は気づく。自分の後ろの方で誰かが見ているということ。それはそうだろう。自分しかいないというのに他の誰かの影が現れてきたのである。　大きさ的には女性と分かる。女性特有の胸のふくらみがあるためにである。

「一体誰ですか?」

男子が振り向くとそこにはベリーショートヘアで前髪を長くしている女子生徒がいたのである。見るからに男子よりも年上の雰囲気を只寄らせている。

「ええ？　ごめんなさい。私青道高校野球部のマネージャーをしている。夏川唯と言います。　貴方の名前を聞いてもいいかな？」
「親切にありがとうございます。僕は海王中学校3年の神木・真一と言います。（可愛い先輩、一体何で僕話しかけてくるんだろうか？）」
「そうなの？　ところで毎日のようにここに来て投げ込んでいるの？私ここを毎日通ってから帰っているんだけど」
「ええ、僕にはシニアや野球部に通うお金が無いんですよ。だから、こういうところに来てから投げ込むしかないんですよ」
　男子生徒の名前を神木真一と言うらしい。目の前の知らない女子生徒と話すのは緊張してしまっているのである彼は少し女性に対して上がってしまうというものである。中学のクラスでも1対1で女子とは喋ることはない。しかし、他の男子生徒がいるとなれば上がることもなく喋ることが出来る。どういう訳か今の彼は上がることもなく1対1で女性と話す事ができている。
　更には神木の家は母子家庭である。父親は幼い頃から行方不明の状態である。兄妹は妹が2人いる。真一は中学生でありながら、学校の許可を取って早朝から新聞配達や牛乳配達などを行って生計を助けている。
「そうだったの？　ところで貴方はどこの高校に行く予定なの？」

「僕は高校には進学できません。僕が働かないと家で待っている妹達を食わせていけないんですよ」

真一がそう言うと夏川は黙ってしまう。それほどまでにも残酷な家庭に育っているのだと悟っているのである。夏川はどちらかといえば裕福な家庭に育っている。その為にこのような中学生がいるとは思わなかったのである。

「そうだ！　うちの高校に野球部推薦入学と言うのがあるんだけど、それで高校に入学するればいいんじゃないの？やっぱり高校を出ておかないといろいろとあとの人生に響いてしまうよ？」

「え？　野球部推薦入学ってあるんですか？」

「うん、うちの野球部は強豪だからね。でも近年エース投手がいないから甲子園には行けてないんだけどね。そこで私から監督と部長に伝えておくからそのへんは大丈夫だよ」

ドックンっと僕の心臓が脈を打っていく。高くなっていく鼓動、心拍数――――僕は野球がしたいのか？何でだろう。部活なんかに行ってしまったら、誰が妹達を養って行くと言うんだ!?

……でも一度しかない高校時代戦いたい。色々な学校と球児達と甲子園をかけて熱く、熱く、熱い甲子園をかけた全身全霊の試合がしてみたい！

僕はその欲求に勝てるわけがなかった。もしかしたら、甲子園に行き、そしてプロの世界で戦えるようになれば、妹達を食わせていける。　そう考えれば今高校に行くのもいいと言う考えが出てしまっている。

でも、受けてみるだけでもいいだろう。僕は自分の力が何処まで通用するのかを見てみたい。

この時神木真一は立派な球児になろうとしていた。まだまだ荒い荒い原石であるが、磨けば磨くほど光沢が光っていく原石になるのである。

「分かりました。僕もその試験だけを受けさせてもらえませんか？　家族にも相談してみたいので」

「そう？　分かったわ。そうだ。携帯電話は持っている？」

「携帯ですか？一応念の為に僕と母が持っています」

「これは私の携帯の番号ね。いつ受けるかはこちらから連絡を入れるからね。それじゃ今日は時間をもらってごめんね？」

神木は神木家の長男である。その為に母から携帯だけは何かあってはダメだから、携帯電話を持たされていたのである。登録されているのは家の番号と母の携帯番号だけであった。

神木は内心少し喜んでしまっていた。初めて家族以外からのメールアドレスをもら

う事が出来たのである。更にそれが可愛い女子生徒で有ればなおさら嬉しいものである。

「いいえ、それではまた会いましょう」

「うん」

そう言ってから二人は周りが暗くなり始めている。その為に家に帰ることにしたのである。神木は夏川が走っていく方をジット見つめていたのである。

真一は知らず知らずのうちに一目惚れをしてしまっていたのである。可愛らしい瞳、彼女の一つ一つの仕草、サラサラにしているシュートカットヘアスタイル。そして彼女が毎日使っているのであろうシャンプーの匂いが漂っていたからである。

真一は彼女が見えなくなるまで後ろ姿をジット見つめるのを辞めなかった。

この選択がどのような結果になっていくのかは真一にも世界にもわからなった。

■■■■■■■■■夏川・唯■■■■■■■■■

私は今日一人の男子に出会った。

何時も帰り道の橋の下の落書きされた壁に向かって投げ込んでいる姿を何度も見た事があった。最初の頃は頑張っている中学生かな?にしか思わなかったんでけど日に日に彼を見ているとどんな人なんだろうか?と言う気持ちになっていた。

今日は部活帰りにその人の投球練習を見てみることにしたの。私は行くころまでまだ居るのかな、それとももう居ないのかなと考えながら向かっていく。何時もの橋の下に到着してみると私が来るまで相当投げ込んだのだろうと伺えるほどの大粒の汗を額から流していた。

私は何故かほっとしてしまっていた。この時何故このような感情になってしまっているのかは分からなかったけど、次第にこの気持ちがわかるようになってきていた。この時から私は彼に恋をしてしまっていたという事をね。でもこの頃は気づいていなかったわ。

私はゆっくりと音を立てずに一番見えやすい場所まで行き投球を見ることにしてみた。彼の投球を見ていると球種がわかってきた。私も一応マネージャーをしている。そのおかげで少しばかりは野球の知識がついて来ている。見てみるとキレと変化量が申し分ないスライダー、おそらくカーブだと思われる球、中学生にしては珍しい球種であるフォークを投げ込んでいた。ストレートは１３０キロくらいは出ているんじゃないだろうかと思ってしまう。

私もびっくりしてしまった。何でこんなにキレイに投げ込めるのにこんなところで練習をしているんだろう?と思ってしまう。もし彼が進学先を決めていないのなら私の青道高校に入って欲しいと考えてしまう。

うちの青道高校の投手はカーブだけの田中先輩、丹波先輩、スライダーが武器のサイドスローの川上君しかいなかった。ここまで器用にコースに投げ込んでいるのはいなかった。この人が同じチームに入れば投手の安定性も増すんじゃないの?と思ってしまった。　私の学年に野球雑誌「野球王国」に取り上げられるほどの逸材とされている御幸一也君と組めば物凄く強いチームになるんじゃないのかと考えていしまう。

それから私が5球程の投げ込みを見ていると不意に声をかけてくる。いきなり声をかけてきたから驚いてしまったわ。何故分かったのかと思っていると私の影が彼の場所まで伸びてしまっていたんだわ

私は観念してから彼の場所まで行き名前を言ってみる。それに彼の顔を見てみると年齢の割にどちらか問えば童顔の顔をしている。茶髪の髪を後ろで一つに纏めていて人懐こそうな笑みを浮かべている。何故か私の母性反応を十分に刺激してくるものであった。

茶髪の髪をしている彼は神木・真一君と言う。この東京で硬式野球でそこそこの強さを誇っている海王中学校出身と聞いたわ。

私が何故こんな所で投げ込みをしているのかを聞くと家族が貧しくてお金が無いからと言ってきたわ。お金がない無いなんてと思ってしまう。私はそう言いながらも金を持っている子を今までに何人も見てきていた。だからこの子も嘘をついているんだと思っていた。でもそれは覆ることになってしまっていた。

何故かというと私がふと真一君が使っているグローブとボールを見てみる事にしてみた時に、するとそのグローブの網の部分はもう破れてしまっているのに使っており、ボールでも縫い目の部分を自分で縫ったのだろう補修されている跡があった。

そのあと彼の話をいろいろ聞いていくと私の常識をすべて壊していくことが知ることが出来たわ。頼れる人がいない為にこんな中学生でバイトをしてから家計を助けていること。自由に使える時間がほとんど無いと言う残酷な状況だというに真一君は全く嫌な顔をせずに行っている。

私の中学生のころは毎日のように遊びをしたり、野球部のマネージャーをしたりとしてしていたのに、たった2つほどしか変わらない中学生と覚悟の違いを見せつけられてしまっている。

真一君は3人兄妹の長男で中学3年生と言うこと。母子家庭で家計が貧しくて中学生でバイトをしているという事、高校に進学せずに就職することが分かった。何故そんなに無理をしていこうとしているんだろうか？父親がいないだけで覚悟を決めれるん

だろうか？妹がいるだけでそんなに変わってしまう事なんだろうか？　私は自分で自問してみるけど答えは出てこなかった。

私は今まで何一つ苦労など全く知らずに育ってきたのに、苦労を知り尽くしている真一君。私は彼のことをもっと知りたい、もっと感じたいという感情になっていた。

私は彼に青道高校の野球部推薦入学を教えてあげた。すると彼の左手が拳を作って震えていた。真一君は妹達を育てていかなければならないと言っていたのに心の奥では色々な球児と戦いたいと言う感情が芽生えていたのんだろう。

もし、合格したら野球部を甲子園に連れて行って。そして私に真一くんがマウンドで堂々と投げている姿を見せて欲しい。

そう思いながら私は私の携帯の番号を真一君に渡して帰り道について行く。

次の日になると私は学校に行く準備をしてから登校する。野球部の朝練の前に片岡監督と太田部長のいる監督室に向かう。

■■■■■■■■片岡鉄心■■■■■■■■

俺はこの青道高校野球部で監督をしている片岡鉄心（かたおか・てっしん）と言う。数年前にプロ入りが決まっていたのだが、自分を鍛えてくれた母校青道高校野球部の為に何か出来ないかと考え、プロ入りを蹴り母校の監督に就任した。

「打高投低」と言うのが今のチームにあってしまう。打撃力だけではこの東東京地区でトップクラスの高さを誇っていると言われている。チーム得点平均は6，21と高いものである。得点が高い物であるが、圧倒的に失点が多すぎる。チーム失点平均7，89、四球平均5，21とこの二つのせいで何度も試合に負けてしまうことがあってしまっている。

そうこのチームには絶対的エースが不在なのだ!!

その為にこの地区で強豪と言われている稲代実業、市大三校の甲子園を取られ続けていたこれは早急に投手育成を急務とされてしまうものであった。

スカウトの高島礼（たかしま・れい）には今年の年は投手を主にスカウトさせている。しかし、それでも絶対的エースになれる人材ではないと俺の感が告げていた。あと夏の本戦まで半年を切っている。それまでに何とかして投手を探さなければならない。

そんなある日である俺と部長の大田、スカウトの高島の3人でどの投手を獲得するのかを話し合っていると不意に扉を叩く音が聞こえてくる。

コンコン

「片岡監督少しいいでしょうか?」

「その声は夏川か?　入ってきていいぞ　いったいどうしたんだ?　朝練の前に何か用でもあるのか?」

その声の主は1年のマネージャーとして入部してくれた夏川唯であった。珍しいことに彼女がこの様な場所に来るなどあまりない。しかし、この場所に来たということで何かあったのだから来たのだということが分かる。

片岡は中に入るように夏川に許可を出す。

夏川は俺のことが苦手用だな。それはそうか？　俺は何時でもサングラスを携帯している。その為に部員達から怖がられていることは知っているからだ。

無論他のマネージャー達もその影響を十分に受けてしまっているのは知っている。これは俺のトレードマークみたいな物だからな、絶対に外すことはないだろう。

「忙しい時にすみません。　実は昨日に結構いい投手を見つけたんですけど」

「投手を見つけた？　礼、リストを頼む」

俺は高島に投手のリストを手渡してもらう。そしてそのリストを見ながら夏川から名前を聞く。

「海王中学校の神木真一君という方です」

「か…神木真一だと!?」

俺は信じられない名前を耳にしてしまった。あまりの驚きぶりに太田部長、スカウトの高島、マネージャーの夏川までもが俺の変貌ぶりに驚いてしまっている。

神木・真一――――俺の記憶違いでなければあいつの子供のはずだ！俺の野球の原点を

教えてくれた幼馴染の子供のはずだ。しかし、アイツは数年前に――――してしまったはずだが…

「済まない。取り乱してしまったようだ。それでどの様な球を投げると言うんだ？」

「えっと、球種が３つほどありました。左投げでスライダーとカーブ、フォークのです。ストレートの球速が１３０後半ぐらいの球です。バッティングの方はわかりません」

　ますます聞いていくうちに俺の脳裏にはあいつの顔が浮かんでくる。互いに切磋琢磨していき、互いの持っている技術を教えあった神木東葉（かみき・とうよう）が浮かんでいた。同い年には見えないほどの童顔の彼であったが、投げると闘志をむき出しにして投げ込んでいた。おそらく息子である彼も相当な技術を持っているだろう。

「そうか？　一応彼を１週間後の土曜日に呼んでからテストを行う。想像している以上の者であったら野球部推薦入学をさせるぞ。それを彼に伝えておいてくれ」

「分かりました。私の要件はこれだけです。これで失礼します」

　そういってから夏川は頭を下げてから部屋から退室していく。完全に出て行くのを確認してから片岡は全ての体重を椅子にかけるように座っていく。

「一体どうされたと言うんですか？　片岡監督？」

　高島は片岡に心配想に聞いてくる。その表情は少し驚きが混じっているものであったが、それを出さずに聞いてくる。

「いや、何でもない。済まないが少し一人にしてくれないか？時間になったらグランドに向かう」
「分かりました」と言って太田部長と高島スカウトは監督の部屋から出ていく。
「まさかな。あいつの子供が野球をしているとは思わなかったな。しかし、これも奴の息子という運命なのかもしれんな？　そうだろう？　東葉？　お前の子供、もし来るというのなら俺がしっかりとエースに育ててやるからな。それにこれも奴の悪巧みというやつか？それとも神が遊んでいるというのか？」
　そう言う片岡であるが、そのグラサンの目には少し涙が流れていたのである。一体これが何を示しているのかは誰にもわからない。
　片岡鉄心と神木東葉と言う男との間に一体何があったのかは今はまだ誰にもわからない。
　この二人に何があったのかが知るのはまだ先の未来の話。

第2話　推薦テスト　前編

■■■■■■■■■■神木真一■■■■■■■■■■

真一は夜家に帰ってから母親に相談してみる事にした。
すると母親からは「お前のたった1回しかない。高校時代なんだからやりたいようにすればいい。家庭の方だって気にすることはない」と言ってきたのである。
これぱかりには真一は母親に感謝をした。その日は真一は疲れてしまっており、風呂に入ると布団に入って眠りについてしまっていた。
次の日の朝になると携帯には夏川先輩からメールが入っており、何処で試験を行うのか、日付時間が細かく書かれていた。　服装は動きやすいものでくるように書かれていた。
真一は持っているもので一番動きやすいものと考えると学校のジャージしか思いつかないって言うか！これしか持っていないのだ。
それから1週間は毎日のように何時もの様に橋の下で投げ込むをしたり、近くの公園でランニングのキツメを行ったりして時間を費やしていた。そのおかげでもともと身

体能力には恵まれていた真一の体は更に磨きがかかってきていた。
投球の方では６０球を超え始めると疲れが見え始めてしまい、球を投げるときに抜けてしまうことがあってしまっていたが、今は前と比べて７０球ぐらいまで投げても問題なくなってきていた。
今真一は青道高校の正門に来ている。
ここまでの道のりは母に聞いてからやって来たのである。しかし、ここから先は目的地であるＡグランドに向かわなければならない。
青道高校は中学校の校舎に比べて広い。真一が通っている２倍は軽くあるんじゃないんだろうかと思ってしまうほどである。その為に何処に何があるのかすら分からないでいたのである。
「おーい！　真一くん！」
「ああ、夏川さん！」
真一が途方に暮れていると校舎の向かうから一人の女性が走ってくる。声の主からもそれはこの前会ったばかりの夏川のものであると分かった。
「ごめんね」と言いながら近寄ってくる。
その表情を見ると僕は何故か心に安心感が生まれてしまっている。何故と思ってしまう。僕の心は夏川さんと会いたがっていたというのか？でも、僕にも何故かは分から

ない。

「それじゃ、今から案内するからついて来てね」

真一は頷いて同意を示す。

「そう言えば、どうやってから変化球を覚えたの？」

ビックと真一の体が一瞬震えてしまう。それはそうだろう。リトルや野球部に入ったことのない真一がここまで変化球を覚えることなど普通ありえないのだから仕方がない。

答えるべきか、答えずにはぐらかすかを考えていると真一の視界に夏川の顔入ってきてしまう。その表情から伺えるのは「教えて欲しいな」と語っているものであった。

やれやれと首を振る。

「僕は何時もこのノートに書かれているように練習をして来たんですよ」

そう言って鞄から取り出してきたのは1冊の古いノートであった。それは何年も使っている様子で、ノートのあちこちがボロボロになってしまっている物である。

真一は手に持っていた古いノートを夏川に手渡す。

「……凄い、詳しくどの様に練習すれば良いかが書いてある。それに変化球の正しい握り方や投げ方まで載っているなんて、こんなもの一体どこで手に入れたの？」

「分からないんだ。家の本棚の中に置いてあったんだ。何時誰が入れたのかが分からな

いんだけどね母に聞いても知らないとしか言わないんだ」

夏川はその中を見てから驚きを隠せずにいてしまう。その為に一体何でこれを手に入れる事が出来たのかを聞くが当の本人である真一は本棚の中に入っていたのだという。疑問に思ってから母に聞いてみたが、何処か言いにくそうにしながら「知らない」と言うだけである。

しかし、本当にこんな詳しく書かれている物など市販の本屋に売っている本などと比べ物にならないものである。

それからも真一と夏川は雑談を行いながら目的地のＡグランドに向かっていく。目的地に近づくにつれて、硬式のボールを金属バットで打つ独特の音が聞こえてくる。

その音が聞こえてくるに従って真一の心がゆっくりと鼓動が大きくなってくる。

そう、神木・真一のなかに眠っている闘志がこの時から着火し始めていたのである。これがどのような結果になるのかはわかない。しかし、気持ちが高ぶっているのはわかる。

長年リトルや野球部に通えずに毎日のように１人で練習していたのだから、これほどの興奮に勝てる者はないものである。

そしてＡグランドの中に入っていくと練習をしていた部員達が全員真一の方を見ているのである。それを見ながら夏川の後について行くとグラサンをかけていて一人だ

け異常な威圧感をただ寄らせている男がいたのである。
彼の名前は片岡・鉄心監督である。この青道高校野球部総勢１００名近い部員を育てている監督である。異様な威圧感をただ寄らせながら近寄ってくる。その隣にはメガネをかけている女性と少し暗い表情をしている男子生徒が立っていた。その彼はレガース、プロテクター、キャチャーミットをはめているいたのである。つまり彼は捕手ということが分かる。
「君が神木真一君か？　俺は片岡鉄心、この青道高校野球部の監督をしている。今から君の推薦入学が相応しいかテストを行う」
「はい、初めまして僕は神木・真一と言います。今日はよろしくお願いします」
真一は片岡に頭を下げて挨拶を行う。その表情は彼から放たれている威圧感で少し硬くなってしまっているが、それ以外は何ともないような感じである。
「テスト内容は制球力テストと実践テストの２つを行ってもらう。最初に肩を作ってきてくれないか？　この滝川が勤めてくれる。彼に何を投げるのか、サインを決めておいてくれ。準備が出来たら声をかけてくれ」
それだけを言うと監督はベンチに入ってから僕の準備が出来るまで待っているという。
「初めまして、俺は今回お前のキャチャーを務めることになった。２年滝川・クリス・優

と言う。一応捕手をしているが、正捕手では無い」

「初めまして、僕は神木・真一と言います。今日はお願いします。滝川先輩」

　真一はふと思う。何故この人の目は輝いていないんだろうか？　今まで色んな人を見てきていたけど、ここまで目が曇ってしまっている人を見たのは初めてだ。　彼に何があったんだろうか？　今は僕が出来ることを全て出し切るしかない。

「さて、神木、お前はなんの球種を持っているんだ？」

「はい、僕が持っている球種はスライダー、スローカーブ、フォークの３つです」

「なるほど、そうか？（３つも、持っているのか？そんなに持っているとは思わなかったがな。どれくらいのキレと変化量によって評価は変わってしまうがな）ブルペンで肩を作る前にサインを決めておく。――――ということだ。わかったか？」

　真一は頷いて肯定する。滝川先輩のサインを覚えていく。元々学力が高い方であった真一はすぐにこれを覚えることに成功した。　そしてブルペンに移動するとスピードガンを持っている夏川が待っていた。　彼女によるとどれくらいの球速を持っているのかを図るために来たのだという。１０分ほどで２５球ほどゆっくりと肩を温めながら投げ込んでみる。それと初めてマウンドというな場所で投げるとどうなるのかを考えながら投げてみる。

（少し違和感があるけど、何時も通り投げられそうだ）

更に１０分程２０球を座って投げ込む。暫くしていくと滝川先輩から声がかかる。
「よし、そろそろ上がるとする。それじゃ先ずは制球力テストを頑張ってくれ」
「分かりました」
そう言ってからブルペンから出ていく。
そしてから片岡監督が待っているベンチまで戻っていく。
「片岡監督、十分に肩を作ることができました。テストを開始してください」
「分かった。今からテスト内容を言う」
そう言ってからテスト内容を片岡監督が話す。話を聞いていくうちに次のようなことであった。
@１：コース指定は片岡監督が行う。
@２：投げる球種も同様に片岡監督が決める
@３：投げる場所はストラックアウト形式にする。
@４：変化球でコースに決めたら2点、ストレートの場合は1点とする。
@５：最後に投げ込むのは２０球である
まぁ、大体こんなところですね。ほとんど何も考えることはないなです。ただ、片岡監督の指示に従ってから行えばいいということです。それでは初めての制球力を試されるので緊張してしまうかもしれませんがベストを尽くすしかありませんね。

真一はマウンドに上がり、ピッチャープレートに付いている土を左足ではらう。そして目の前の９分割にされているストラックアウト式のストライクゾーンを見つめる。

「よし先ずは５番にストレートを頼む」

「はい！」

そう言ってからテストを行っていく。一つ一つ指示されたコースに丁寧にピッチングを行っていく。

ストレート、スローカーブ、スライダー、フォークはまるで真一が願っているコースに意思でも持っているのではないだろうかと思ってしまうほどのものであった。

周りでこの様子を見ていた青道高校の野球部員は驚きの表情を隠せずにいた。それはそうだろう。まだ中学生がこれほどの制球力とスピード、変化球の変化量も申し分ないのだから。

この様子を見ていた片岡監督の顔も神妙なものに変わってしまっていた。真一の一つ一つの動作が彼の父である神木東葉がこの場所に来て投げているのではないだろうかと思ってしまう。

その結果を受けて思わず頬がにやけてしまっていた。これほどの逸材がどこの高校もマークしていない投手がいたのである。　ここまで片岡監督の心の中で付けている点数は３５点というところである。あとは次のテストでどれくらいの実力を発揮でき

るかである。

ＳＩＤＥ　ＣＨＡＮＧ

いったい何なんだこの男は？

俺の名前は滝川・クリス・優と言うもうすぐ三年になってしまう2年生だ。元は丸亀シニアの関東ナンバーワンキャチャーとして名を上げるほどの捕手だったんだが、今年の夏の本選前に方を壊してしまい戦列を離れてしまったんだ。しかし、もう俺の肩は診断の結果来年の夏の本選には間に合わないだろうと言われてしまった。それでも俺は可能性を信じてからまだ選手として甲子園を目指している球児の一人だ。

だが、1年という時間の間戦列を離れてしまうという事は高校球児にとっては事実上の「引退宣言」に等しいものである。だが、俺はそれでもいい。例えチームメイトとの間に溝ができようが、諦めることは出来ない。

ある日監督に呼び出されてしまった。

いったい何の用事があるのだろうかと思って監督室に向かっていく。そろそろ、俺も監督に切り捨てられてしまうのだろう等と考えながら扉を開ける。

結論から言うと退部勧告ではなかった。

どういう訳か来年入ってくる球児の野球部推薦入学に相応しいかどうかをテストを行うらしい。その時にその球児とバッテリーを組んでくれないか？と頼まれた。あの

片岡監督が直々に目をつけたのだろう。相当な腕を持っているのだろう。

しかし、話を聞いていくうちに信じられないことを耳にしてしまった。

それは「野球部推薦入学が妥当かどうかをテストをしに来る奴は野球部自体に入ったことはない。そのために投手の能力を最大限に引き出す事の出来る滝川、お前しかいないのだ。頼む引き受けてくれないか？」と言ってきたのである。

仮にもこの青道高校野球部は名門とはいかないが、東京地区では強豪校をはることの出来るチームである。６年前にも甲子園に行った程のチームでもある。

まぁ、その時は俺は少し頭が混乱してしまっていて「はい」と答えてしまった。言った時には流石にまずいのではないかと思ってしまったが、この片岡監督には今更「いいえ」とは答えることはできないのである。

試験を行う場所は青道高校野球部のＡグランドで今週の土曜日に行うらしい。その日は特になにもリハビリなどは夜に行っている。そのために時間は問題はなかった。それに久しぶりにキャチャーとして投手をリードできるという事が内心嬉しいものであった。

そしてから俺は１週間後の試験日を迎えた。俺も全身を一時期つけていた無かったレガース、プロテクター、キャチャーミットをはめてから片岡監督と共に受験者を待っていた。

すると向こうからマネージャーの夏川唯に連れられてから歩いてくるナチュナルの茶髪をしている男子生徒がいたのである。髪は染めてはいないのだろう元々の色をそのままにしており、自毛という事が近くに来てからわかった。

まぁ、そんなことはどうでもいい。これから俺はこの投手をリードしてやらないといけないんだからな。それにもし直球だけと言われてしまったらどうリードしようかと考えてしまう。

俺が簡単に自己紹介を行うと茶髪の男子生徒も自分の自己紹介を行ってくる。そのあと感じな何の変化球を持っているのかを聞いてみることにしたのである。

しかし、俺の心配事などはすぐに吹き飛んでしまった。何故かと言うとだ。

「さて、神木、お前はなんの球種を持っているんだ？」

「はい、僕が持っている球種はスライダー、スローカーブ、フォークの３つです」

これればかりには驚いてしまったな。素人といってもいいはずの男が３つの球種を持っているというのだから。しかし、３つ持っていようと球威とキレと変化量を同時に操ることが出来なければ、ただの少し変化する球にしか思われることしかない。

俺は実際にどのくらいの球なのかも興味があった。

神木真一とか言う男はブルペンに入る。ゆっくりとしたフォームで投げ込んでくる。フォームにも特に癖などはない。この投げ込むフォームは殆どの者が叩き込まれるこ

とのあるスタンダードであった。

俺が真一に要求したのはストレートを投げ込むように指示を出す。スタンダードから投げ込まれたフォームのストレートは俺のミットまで真っ直ぐ飛んできてキャッチする。ノビとキレも申し分のない程のモノと分かる。それから１０球程のストレートを投げ込ませていく。そこで分かったことは真一の球威は１３０後半位とわかってくる。まだ中学生にしては早い。このチームのエースである丹波は１３７キロほどである。それと同等の球を投げ込んでいるのだから驚きだな。

次にスライダーを投げ込ませてみる。真ん中あたりから急激に変化してくるほどの変化量だな。これほどの変化量とキレを維持しながら投げ込めるのだから相当な練習を行っていったのだろうと俺は思った。１年に川上と言うスライダーを武器にしている奴もいるが、それ違った変化の仕方だな。

スライダーを１０球投げ込ませてから次の球種であるスローカーブを投げさせてみる。スローカーブは高校生投手のあいだで投げられるカーブよりも更に球威も変化量も一段階落ちるものである。およそ１００キロ程の球威でドロンと落ちてくる変化球である。変化量だけが物足りないと思ってしまった。弱小校程度の相手ならこのスローカーブとストレートだけで試合を行うことができると思ってしまった。緩急をつけたピッチングがしやすいからな。

今までにストレート、スライダー、スローカーブの3つを見てきていた。最後の球種であるフォークの球を投げさせてみる。ストーンと球威も１２０ｷﾛ位で突如打者からの視線から消えるかのように落差があるものであった。ここまで落差のあるフォークを投げ込んでいるもの等は見たことがなかった。

俺は真一の持っている球種を一通り全て投げさせてから、驚愕な表情を表に出さないようにしながら内心驚きを隠せなかった。

（こいつは本当に指導者などはいなかったのか?ここまで完成しつつある素人などは見たことがないぞ!?それにこの男が2年後にはどんな風に化けていくのかも楽しみもあるな。それだから監督も野球部推薦入学をさせようとしているんだろうな。楽しいな捕手……!?俺はまだ捕手と言うのを諦めていないのか?……俺はまだ捕手をやりたい！　もっと投手をリードしていきたい！このまま高校野球を終えるなんてまっぴらのゴメンだ！）

滝川は監督の観察眼に関心をしながら真一を真っ直ぐに見つめていた。これほどの男がこのまま埋もれてしまっては勿体無い才能を秘めていると確信してしまった。

この時からであろう。今まで目に本来あったはずの光がなくなってしまっていた滝川であったが、神木真一と言う男との出会いがあったおかげで、再び目の奥から光がやどり始めていた。

この結果がどのように滝川・クリス・優にとってどのようなものになるのかは分からない。しかし、これだけは言えるであろう。決して悪い方に転ぶことはないだろう。

第三話　推薦テスト　後編

神木は制球力テストを無事に終えた。片岡監督の指示した場所にストレート、変化球を一球一球丁寧に投げ込み次々に得点を重ねていき、最終スコアは三十八点となった。自分としてはまだガチガチに固まってしまい、思うように点数を重ねる事ができなかったんだけど、片岡監督に言わせれば上出来だったらしい。何でもここまでの制球力を持った投手は中々いないらしい。今までの最高点数が現一年の川上憲史（かわかみのりふみ）という先輩が三十点で一位だったのだが、それを抜いて僕が一位になってしまったらしいです。

「うむ、制球力テストはこれで終わりだ。次のテストは一旦十分の休憩を挟んでから行う。テスト内容は打者との一打席勝負だ。それを現レギュラーの伊佐敷、小湊、結城の三人に相手をして貰う。以上一時解散！」

「はい」

片岡監督は真一に制球力テストの合格を言い渡し、少しばかりの休憩を入れると言う。彼の後ろには今名前を呼ばれた三人の先輩が威圧感を出しながらこちらを睨みつけるかのように見つめてくる。彼は先輩三人を引き連れて去って行く。

　真一は彼らが去って行くのを見つめ、完全に見えなくなると自分も一度水分を補給するためにバックをおいた場所に向かって行く。途中何度も先輩方の視線を気にしながら、少し早足になりながら向かう。
「真一くん！」
「・・・（ゴクゴク）・・・・あ、夏川先輩・・・どうしたんですか？」
　真一は木陰に座り込み水筒を飲んでいると、聞き覚えのある女性の声が聞こえてくる。一体誰だろうと思い、声のする方を見てみるとそこには自分をここまで案内してくれた夏川唯が手を振りながら近づいて来ていた。思わずその姿に見惚れてしまっていたが、それを隠すかのようにすぐさまに彼女の名前を呼ぶ。その光景を周りの先輩達は少しばかり殺気立っていたのだが、自分が見惚れてしまっていたのを隠すのに必死だった彼がそれに気づく事はない。
「凄いわね。あんなにコントロールが良かったとは思わなかった。次はレギュラーとの一打席勝負、先輩達三人共手強いけど頑張ってね。応援しているからね」
「ありがとうございます、夏川先輩。次の先輩達との勝負頑張ります」
「少しこれを食べて見て」
「頂きます。（パク、モグモグ）・・・・・これはレモンのハチミツ漬け？というやつですか？実際に食べたのは初めてです。酸っぱくて美味しい、夏川先輩作ってくれてあり

がとうございます」

夏川は持っていたバックから小さめのタッパーにレモンのハチミツ漬けが入っている。レモンは丁寧に一枚一枚切られており、そのレモンが浸かるほどのハチミツが浸してある。ほどよい酸味と甘みが丁度良いくらいにマッチしている。初めて食べたレモンのハチミツ漬けがここまで美味しいのかと少しずつ少しずつ食べるスピードが上がって行き、三分ほどで全てを食べ尽くしてしまう。

「・・・・・・ふぅ、美味しかったです。ありがとうございます」

「(わぁ、凄い食べっぷりね)うん、また機会があったら作るからね(もし、入部したら時々作ってあげよう。こんな食べっぷりを見たら女性として嬉しいからね)」

夏川は一心不乱に自身の作ったレモンのハチミツ漬けを食べてくれている真一を見て、もし彼が入部した時には必ず作ってあげようと一人心の中で誓う。自分が初めて個人の人物に作った物を頬一杯に詰め込んで食べてくれる。こんなに美味しそうに食べてくれる彼のために早く作りたいと思いながらも、そこはぐっと抑える。目の前でお礼を言っている彼の姿を微笑みながら、彼女も優しく見つめる。

十分後

休憩が終わると片岡監督が近寄ってくる。

「よし! 最後のテストを行う! 最後のテストは今から3人のレギュラー陣を相手にして

一打席勝負を行ってもらう！相手にしてもらうレギュラー陣は「伊佐敷」「小湊」「結城」の三人だ！ヒット性のあたりであれば打者の勝ち、凡打三振であれば投手の勝ちとする。フォワボールであればもう一度再度対戦してもらう。勝ちか負けのどちらかしかない。決着をつくまで行う。（まさか、ここまでの実力を誇っているとは思いもしなかったぞ？）」

片岡監督の隣には3人の先輩達がバットを持って待っていた。

1人の伊佐敷と呼ばれた先輩は少し強面をしている。今にも襲いかかりそうな雰囲気をさらし出している。

2人目の小湊と呼ばれた先輩の身長はそこまで高くないが不敵な笑みを浮かべている。

3人目の結城先輩はキャプテンである。どうもプレーで他者を引っ張っていくタイプの人と分かる。何故かというと先の守備の練習の時にものすごく気合が入っていたからだ。

「よし！先ず一人目は伊佐敷と一打席勝負をしてもらう」

「はい！」

そう言ってから片岡監督は伊佐敷先輩に指示をする。

伊佐敷先輩はバットで右足のスパイクの土を落として、同じように反対の左足のスパ

イクの土を落としていく。そのあと一回、二回バットを振り、伸び上がってバットを構えてくる。睨みつけるかのように投手である僕を見てくる。

ドクン、ドクン、ドクン

(凄い……これが真剣勝負の感覚だろうかな!?怖い、怖い!でもやらなければ本当の試合になった時には投げることは出来ないじゃないか?だったら今のこの状況を楽しんでいこう!)

真一は静かにマウンドに立っている。

彼は右足でゆっくりとマウンドについているプレートに付いている土を落としていく。さらに心臓の鼓動が早くなっていく音が聞こえてくる。

(先ずは何処に投げていけばいいのだろうか?ええっと・・・滝川先輩のサインは・・・)

(さて、真一の先程の制球力テストを見ている限り調子は良い方だろう。それにこの制球力なら多少キツイコースに放らせる事は大丈夫だろう。さて、お前の実力を俺に見せてくれ!インコースギリギリに外れるストレートを持って来い!)

〝コクン〟と頷くと神木はゆっくりとした投球動作から捕手に要求されたコースに投げる。

〝ビュン〟と言う腕の振りの音が聞こえると、硬球は真っ直ぐ放たれる。

「オラアアアア!」

伊佐敷は球速１２８キロの真っすぐのストレートを打ちに来る。彼は同時に何故か奇声を上げながらである。

カキーンという音を立てながらライト方向に白球が向かっていく。しかし、その打球はぐんぐん右に切れていき、ファールになる。

「ナイス、良い所に来ているぞ！（予想通り、伊佐敷ならば初球から振ってくると思っていた。これでワンストライクになった次はこれだ・・・アウトローにスライダーだ。流石の伊佐敷もこれには手を出してくる。さっきのテストを見ていれば、この投手はコントロールが良いと思って振ってくる）」

「はい！（すごい、あんな早いスイングをするなんて！でも、僕も負けない）」

第三球目。ククッツと急激に鋭く曲がってくるスライダーを伊佐敷は待っていましたと言わんばかりに、強振をしてくる。しかし、ボール一個以上外に出されている球は彼のバットをあざ笑うかのように触れる事もせずミットに収まる。

カウント０―２になり、第三球目のストレートをインハイに大きく外れて１―２になる。

「（これで１―２。コイツの決め球を投げさせるとしよう。今まで俺が受けてきた中でも既に丹波を超える精度と落差を誇っている。これで決めるとしよう。インローにスローカーブを全力で入れる）」

「コクン）（僕は良い球を投げる！ただ、全力で！）」

「（こいつ、本当に中坊か？何てコントロールをしてやがる。それにスライダーの変化も、稲城実業のアイツとほとんど同じだ！球速は体の細さの割には１２０～１３０近くは出てやがる！全く、何故こんな奴が今まで埋もれていた！だが、俺も負ける訳には行かねぇ！絶対に打ち返してやる！）」

伊佐敷は一度バッターボックスから出ると二、三回バットを振り考える。目の前のマウンドに立っている男はまだ中坊だと言うのに、ここまで完成の高いスライダーを投げ、自分がフルスイングで強振しているというのに驚きもしない。それに聞く所によると一度も一打席勝負すらした事のないと聞く。

だが、どうだ？

マウンドに立っている男は？

まるでプロで何年も活躍し続け、不動のエースと呼ばれている投手のような風格を出している。

ゆっくりとした動作で彼は投球フォームを行っていき、放たれる第四球目。

「な、な、なめてんじゃぇぞ!!オラあああああ!!」

伊佐敷の目には絶好球――ど真ん中のストレートが飛んできたのである。この青道高校で上位打線を張っている者としてこれほどまでもない屈辱であった。彼のグリッ

プを握る手に力が入り、長打を狙うべくタイミングを図る。
「っ!!何だと!!」
〝チェックゾーン〟
打者が投手の球を見極められる可能なゾーン。このゾーンから超えてから来る変化球を見極め、打つ事は難しいものである。中学生では一般的にこのチェックゾーンを超える前に変化が始めてしまうことが多い。しかし、神木真一から放たれた球は真ん中のストレート打ち頃の球かと思われたのであるが、違う。チェックゾーンから超えた球はストーンと落ち、伊佐敷のバットは空を切る。
〝フォークボール〟
クリスは神木に最初は難しい球を要求し、コースを徹底的についていくことにより伊佐敷に対してコントロールが良いというイメージを植え付けていく。さらに青道高校でクリーンナップを張っている彼に対してチェックゾーンから超えて来るフォークボールで空振りに仕留める。
「(ここでこの球かよ!)」
伊佐敷は苦虫を潰したかのような表情をしながらバッターボックスから出ていく。
ドクン、ドクン!
「(あれ?僕の心臓何でここまで高まっている?)・・・それに体が軽い?」

始めて実戦形式の対戦をしている神木にとっては初めての経験である。どのようなスポーツにも言えるのだが、初めての試合、緒戦ということで緊張してしまい、ぎこちなくなってしまい十分なパフォーマンスをする事ができなくなってしまうということがある。更には格上の選手と試合する時に緊張してしまって同様なことが起こる。だが、時に異様な集中力が高まる起こることがある。一切の雑念を捨て、目の前の試合に集中してしまう。周りのことなど何も気にしなくなる。それにより本来持っていたはずの力以上の力を出す事が出来る。

今彼自身に起きているのは後者である。今まで対戦ということをしたことがない。とりあえず自分の持っている力を出すしかない。無意識のうちに全力投球をしていた。何も考えない、ただミット目掛けて投げるだけということを考えて投げていたのだ。

「よーし!次!小湊涼介との対戦だ!」

グランドに片岡監督の声が響き渡る。バッターボックスに近づいてきたのは先程薄らと笑を浮かべていた先輩であった。先ほどの伊佐敷先輩と比べては小柄に分類されてしまう先輩である。

さぁ、君の力を見せてもらおうかな？

俺小湊涼介はバッターボックスからマウンドに登っている投手――神木真一という少年へ目線を向ける。約二年前の自分と同じ、いや、それ以上に小柄な彼に最初見た時にはそこまで興味は沸かなかった。二年のマネージャー――夏川唯によって推薦され、今日テストを受けに来た少年で無名な選手。しかし、この少年神木はどうだ？ブルペンで１３０キロに近い球のスピードをコーナーへ投げ込み、制球力テストでは二年の川上以上のコントロールが良い。

・・・コイツ？天才というのか？

俺はそう思ってしまっていた。天才というモノを思ってしまっていた。俺は凡人で他人以上に練習してこの青道高校の二番打者と二塁手のレギュラーを勝ち取った。しかし、神木は聞く所によると今まで指導者無しので自主練習のみで今まで練習してきたらしい。ここまで完成度の高い選手を見たことなどない。・・・現に同学年の伊佐敷を空振り三振に討ち取ってみせた。何故そんなに強い？何故お前そこまでさせる？何が俺達と違う？・・・まぁ、どんな奴でも打つけどね・・・

俺はバッターボックスで何度か素振りを行うとバットを構える。

（さぁ、一球目は何で来る？）

伊佐敷に見せてきた球は一球目インハイギリギリのストレート、二球目アウトコースへ逃げるスライダー、三球目インハイへ大きく外れるストレート、四球目インローへのスローカーブ、そして第五球目真ん中から落ちていくフォーク。どれもこれも打者から打ちにくいコースを狙って投げできていた。ここまで俺は見たことがない・・・楽しみだ。

そしてマウンドの神木はキャチャーからのサインに頷くと、一般的に叩き込まれるスタンダードのフォームで第一球目を投げてくる。

それを彼は目だけで追って見送る。

（・・・一球目はアウトロー一個外れるストレート・・・・・・球速はネクストサークルから見ていたよりも速く感じる・・・中学三年生でここまでのノビとキレがあるなら中堅校、強豪校でもエースをもらってもおかしくはないな・・・それに度胸もいい）

目の前の投手を彼は珍しく褒め称える。あまり彼はここまで褒めるということはない。今まで指導者なしでここまで成長してきた彼が萎縮もせず投げてきている。ならもっと見せてもらおうと思い構える。

二球目インハイのストレートを投げ込み、それを彼は振りに行くがレフト線への

ファールボール、三球目はインローへのストレートをボールとなる。

カウント1―2

（コースにコントロールをしてから投げてきているのか・・・・・・対角線への配球・・・凄いものだ。稲実のアイツと同じようなものを感じる。それに何なんだこいつ？初心者なんだろ？何故そこまで落ち着いて投球ができる！）

小湊涼介は目の前の投手に目を向ける。どう見たとしても中学生が球界で名を馳せた――エースのように堂々としている。普通の中学生であれば高校生と戦うとした時には萎縮する場合が殆どである。だが、彼は違う。萎縮しているどころか最高に気分が乗っている。自分の球に自信があるという風である。

（さぁ、そろそろ俺も本気を出していこうか？）

彼はバッターボックスで再びバット構える。

（目付きが変わった?・・・何かこの人さっきと違う・・・）

神木はマウンド上から目の前のバッターである――小湊涼介に目線を向ける。彼はバッターボックスから発せられる威圧感を感じ取る。初めての実戦形式の経験、バッターとの真剣勝負で感じ取ることができていた。だが、それがなんなのかまだ彼は分からない。だが、これだけは言える。目の前のバッターが本気になっているということ。

（とりあえず、自分のいいボールを投げる!）

四球目を彼は打者のタイミングを外すべく、スローカーブをインローへ決める。

カウント2―2

「（これでとりあえず。平行カウントになることができたか。次は一体どういう球を投げさせるとするか?・・・・・ストレート三球投げさせることにより目が速い球で慣れた事により、スローカーブでカウントを取ることができた・・・もう一度スローカーブを試す。今度はアウトローへ）」

「（コクン）はっ!!」

「（読み通り!）もらった」

五球目を指示されたアウトローのコースへスローカーブを投げる。すると、小湊は待っていましたと言わんばかりにバットを出してくる。

カーン!

と、言う音が響き渡りる。打球はグングンライト線へ伸びていき

・・・・・・ファール!!

ギリギリライト線の外側へ落ちていく。

「神木、良い所へ来ている。大丈夫だぞ!（危ない所だったな・・・少しばかり球が浮いてしまっていたというのもあるが・・・まぁ、良いこの手の攻め方では涼介に通用しないということか・・・・・・少しばかりクサイ所をついていくとしよう。スライダーをアウトハイ、ストライクからボールへなる球）」

「はい!分かりました!」

六球目を投げる。

「ボール!」

小湊はほんの一個分という際どいスライダーを見逃して、カウント2―3となる。

「（本当に中学生かと思ってしまう。だが、ここで集中をきれさせるわけにはいかん。次はアウトローへストレートを持って来い）」

七球目のストレートをカットし、八球目のインローへの際どいフォークボールもカッ

ト、続く１０球目～１２球目も対角線を利用したストレートをカットする。
「（流石、涼介というべきか・・・いや、それよりもここまで集中を切らさずに的確にコースへ投げている奴も凄いものだな・・・・・・・」
「はぁはぁ・・・（この人凄い・・・どんなコースでも対応してくる！でも、この勝負に勝ったらどんな気持ちになるんだろう？・・・さっき以上の気持ちになることができるんじゃないのか!?なら、僕は負けない！）」
彼はマウンドで汗を拭うとロジンバックに手を触れて気持ちを落ち着かせる。
彼はグッと足を上げ、ボールを投げ込んでいく。対戦しているバッターとの真剣勝負で勝ちという喜びを味わうために投げ込む。

カッコーーン！

僕は三人目の打者――結城哲也先輩との勝負で負けてしまった。あ！その前に二人目の小湊涼介先輩との勝負は十六球目のストレートがインハイへ綺麗に決まり三振を

取ることができた。あの人本当にしつこかった・・・何処へ投げようと関係なく打ってくるからだ。でも、三振に取ることができた時には嬉しかった。思わず叫んでしまった。周りのことなど全く気にせずに叫んでしまい、周りにいた先輩達からは少し白い目でも見られてしまっていたけどね。少し、自分がやってしまったことを後悔してしまった。

小湊先輩も強いとおもっていたんだけど・・・やっぱり上には上がいるもんだね。

三人目の結城哲也先輩は厳しいコースを徹底して攻め続けたんだけど、二連続で四球を出してしまい、やり直しになってしまった。中々難しいもので三回目もフルカウントになった時に自分自身渾身のストレートをインハイへ投げ込んだんだけど、綺麗にレフトへ運ばれてしまった。

これで僕の試験は終わりを迎え、片岡監督の下へ向かう。

「うむ、中々良い結果だった。クリスとキャッチボールとストレッチを行ってから上がってくれ。試験の合否は後日送るとする」

「ありがとうございました」

結果はどうあれ僕自身の持っている全ての力を出し切る事ができた。悔いはない。

さて、滝川先輩とキャッチボールとストレッチを行ってから帰るとしよう。

青道監督室

「片岡監督、彼の実力は凄いものではないですか？」

「確かに彼の実力が予想以上でしたよ」

「うむ・・・中学三年生と考えて速球は速い、変化球のスライダーとスローカーブはトップクラス、フォークも中々の切れ味。制球力もトップクラスの実力を持っている。しかし、持久力は平均クラスというものだな。打撃と守備はやったことがないだろうから素人といったところだな」

片岡と高島、大田の三人は今日行われた神木真一の試験内容結果を考えていた。投手としても実力は高いものを持っているが、打撃と守備は素人といってもいい。それはそうだ。今まで行ったことがない。その為に彼らは判断に迷ってしまう。

「ですが、神木くんは打撃と守備は素人ですが、投手としての実力は非常に高いもので

す。ここまで完成されている投手は中々いないと思います。ウィークポイントの打撃と守備は三月からの練習に来させ始め仕込んでいけば、夏までには一通り出来ると思います」

「確かにそうかもしれんな・・・彼を野球部推薦入学生として合格でいいか?」

「私は構いません」

「私も異論はありません」

　そうして彼神木真一への下へ青道高校野球部推薦入学合格通知が届いたのは一週間後のことであった。これにより青道高校へ入学することが決まった。